



トピックス

目次	ページ
1. トピックス	1-2
2. 会員トピックス	2
3. 美術家たちの南洋群島	3
4. 新役員	9

前号・48号カセレーリエ（平成30年6月）以降のFSM訪問報告

第70次訪問団が6/21成田空港出発帰国は6/29 & 7/6でした。

グアム空港トランジット～チューク州モエン島/旧夏島/ジープ/フ

ォノモアツ島～ポンペイ州ポンペイ

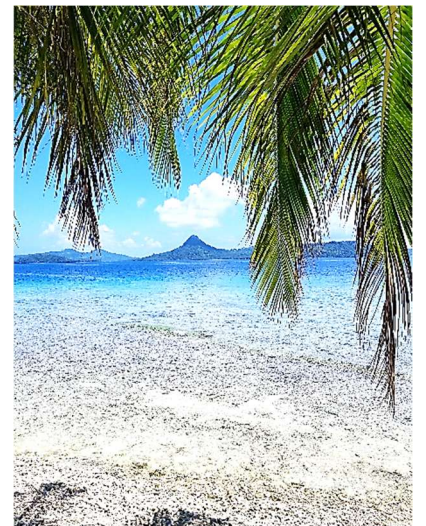
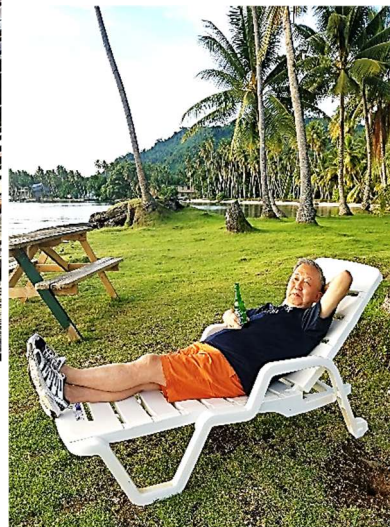
島、団は3名。故瀧野茂雄氏、石渡正明氏、川嶋事務局長が訪問。第139回理事にて報告しました。



左から
故瀧野重夫氏

川嶋事務局長

石渡正明理事



右の写真/右回り 秋永拓郎さん・藤田さん
石渡さん・故瀧野重夫さん
秋永好二さん(FSM支部長)



第49号 ミクロネシア カセレーリエ

NPOミクロネシア振興協会ニュース

令和3年1月3日

Non-Profit-Organization Association For Micronesian Development News

*****第19回通常総会開催*****

日時：2020年7月19日

於）船橋市船橋駅前フェースビル5階



総会議案書表紙

総会・本人出席者の皆さん



左写真
右奥 櫻井会長
左奥から
石渡理事
小島団体会員
池田克彦理事
川嶋事務局長

会員総数：50名

本人出席：5名+委任状提出者33名：合計38名

総会成立要件：会員の1/2

メッセージ頂きました：浜田会員、白川会員、野村会員、根岸会員、藤田顧問、須賀会員、渡辺会員、武部理事、鈴木顧問、阿部会員、川松理事、小椋理事、鹿野理事、長岡顧問、西嶋副会長。

2019年度活動写真



AMD 活動域

ミクロネシア連邦



パラオ共和国



マーシャル諸島





美術家たちの南洋群島 (人物 敬称略にて失礼します)

『美術家たちの南洋群島』作品等の展覧会開催時(2008/4-6 町田美術館)の資料等参考)



小笠原諸島南方の太平洋地域(ミクロネシア地域)は、南洋諸島、南洋、南洋群島と呼ばれます。これらの呼び名の違いと言うか表現はどのようなものなのだろうか。

“南洋諸島”は、日本から見て南に位置することからそのように呼ばれてきていて、最近では太平洋諸島と表現される。又“南洋”は、いわゆる西洋と東洋の表現から来る南洋としての用語と理解して良いでしょう。そして、“南洋群島”は日本の旧委任統治領時代の北マリアナ・カロリン・マーシャルの各諸島の総称です。この用語は歴史的用語です。

南洋群島時代の美術家たちの足跡を追うことで、現代に通じる日本と太平洋島嶼国との関係を理解する一助となります。



南洋群島渡航(1934年～1940年代)の美術家は50人余り、それ以前は、(1911年)の有田四郎氏をはじめ、(1914-1919年)5人、(1920-1933年)9人。1922年(大正11年)南洋庁官制公布施行。南洋群島時代は、渡航手段が充実し始め、それに応じての渡航が容易になってい

った時代でした。そして、明治20年代には早くも人類学的な研究が始まっていました。



第1次世界大戦の戦勝国となった日本は、それまでドイツの植民地であったミクロネシアを、1919年のベルサイユ講和条約に基づい

てこれらの諸島を国際連盟からの「委任統治領」として譲り受けました。

日本の南洋諸島との歴史

1884 明治17年

「1883年マーシャル諸島ラエ島にて起こった日本人漂流民殺害事件」の調査団派遣さる。エイリンラブラブ島に日章旗を掲げる。

1885 明治18年

調査団帰国し復命報告。井上外務卿は激怒。国旗の引き下ろしを下命。同年8月調査団再渡航し、国旗の引き下ろしを済ませる。

1885 明治18年

11月ドイツはマーシャル諸島を占領、保護領とする。

1886 明治19年

志賀重昂(1863生)が海軍練習艦「筑波」に便乗、南洋諸島、オーストラリア等を巡航・視察。



志賀重昂「南洋時事」『志賀重昂全集』第3巻 個人蔵

東京地学協会の終身名誉会員

1889 明治22年

鈴木經勲(南方探検家、著述家→人物評価は分かれる)が南洋貿易と植民を鼓舞する檄文を公表する。

1890 明治23年

田口卯吉(経済学者、歴史家、実業家。東京府会議員、衆議院議員)が「南島商会」を設立。マリアナ、カロリン両諸島へ巡航貿易に出る。ポナペに支店を設け、邦人最初の商社として発足。翌年経営者が変わり、「一屋商会」となる。

ミクロネシア連邦の森・ファミリーの始祖である森小弁は、1891/明治24年にこの「一屋商会」に入社。



森小弁氏は、この年の12月に帆船「天祐丸」に横浜港から乗船し、ポナペ経由、1982/明治25年現在のチューク諸島のウエノ島に到着した。因みに、森小弁と一緒に渡った日本人達が初めてのミクロネシア定住者だった。森小弁氏がモデルとなったのが漫画「冒険ダン吉」です。



1891 明治24年

1890 横尾東作設立の恒信社は、チューク[トラック]を中心に貿易を行う。翌年ポンペイに移り1914年まで継続。

1894 明治27年

南洋貿易日置合資会社設立さる。

1898 明治31年

アメリカが、スペインとの戦争で勝利し、グアムとフィリピンを割譲する。

1899 明治32年

2月ドイツがスペインより、マリアナ、カロリン両諸島を譲り受ける。ポンペイに総督府を設け、ヤップとサイパンに地方庁を設置する

1908 明治41年

南洋貿易日置合資会社が南洋貿易村山合名会社を合同して南洋貿易株式会社となる。

(この時期から美術家が南洋諸島を巡る。帝国練習艦に便乗したり、民間船も巡行しだすと共に訪問者増えていきます)

1914 大正3年

第一次世界大戦が勃発。日本は日英同盟に基づき、連合側側に立って、英国のドイツへの宣戦布告を受けて、太平洋を南下(8月)、南洋諸島に展開していたドイツは呆気なく降伏(10月)。旅行中のドイツ表現主義者の画家が日本海軍に拘束される。

10月日本海軍は、ドイツ領マリアナ、カロリン、マーシャル各諸島を占領する。臨時南洋群島防備隊条令を發布して軍政を開始。チューク・夏島に司令部を置く。

(欧州における戦線は拡大膠着状況に落ち込んでいく。日本は日英同盟に基づき地中海へ)

1915 大正4年(第一次世界大戦中)

北島浅一(東京美術学校卒業生)がサイパンにわたり(絵画)制作する。

南洋群島占領諸島施政方針を策定。

6月海軍省が日本と南洋群島間の航路を開設し、南洋貿易株式会社に受命させる。この年、南洋群島の酋長ら22人が石貨などを持って来日。話題を呼ぶ。

南洋群島小学校規則を公布し、チューク、サイパン、ヤップ、パラオ、ポンペイ、ヤルートの6ヶ所に現地児童のための小学校を設置。

1916 大正5年(第一次世界大戦中)

東京美術学校卒業生たちが南洋群島へ

1917 大正6年(第一次世界大戦中)

この年、年季奉公が開けた蒲郡の大工・杉浦佐助が南洋群島に渡る。

南洋殖産、南洋拓殖株式会社創立。9月南洋貿易航路を廃止。日本郵船が新たに海軍省命令航路南洋船として開設、秋田丸が第1便

1918 大正7年(第一次世界大戦中)

ポンペイ・キチに小学校設置。

臨時南洋群島防備隊条令を改正し、軍政庁を民生署に改称、民生部を設置。南洋群島島民学校規則を制定、新たにロタ、モートロックなどに7分校設置。南洋群島移民規則を定める。航路が整備されつつあり、美術家の渡航はし易くなる。

1919 大正9年(第一次世界大戦終結)

第1次世界大戦終結、パリ講和会議にて南洋群島の委任統治国が日本に決定する。6月ベルサイユ講和条約調印。



余談

第1次世界大戦に参戦した日本は、アジア地区で多くのドイツ人捕虜を日本国内で收容しました。有名な收容所は四国の松山ですが、千葉県の習志野市にもありました。

この收容所の所長は、当AMDの川村顧問の祖父でした。川村顧問は2005年8月AMD第21次訪問団に加わって、ミクロネシア連邦のポンペイに行かれました。



息子 Mr.フレドリック・ヘルゲンバーガー

その目的は、ドイツ兵として捕虜になっていたミクロネシア人の子息や孫と会うためです。当時はドイツの植民地でしたミクロネシア(人)が徴兵されていたのです。

川村顧問の祖父は、“彼はドイツ人ではない”として、ポンペイに送還しました。そのことが息子や孫に伝わっていて、習志野市の教育委員会経由で当方に連絡が届いたのです。

訪問団渡航後、大村臨時代理大使には、お世話になりました。

余談の余談ですが

帰国したヘルゲンバーガー氏は、死なずに済んだが、日本での捕虜の待遇は、大変良かった。外出はフリーであり、ドイツ人がソーセージ作りなどを日本人と一緒にしたりして、戦時の捕虜であることを忘れる様な処遇であったとの事。息子には「本音は帰りたくなかった、特に日本での食事が大変よく、その為帰りたくなったと」いつも言っていたとの事でした。



感謝⇒習志野市役所の皆さんに感謝を伝えてほしいとの伝言を預かり、帰国後報告。

1920 大正9年

1月、日本郵船による海軍省命令南洋航路が、東廻り線と西廻り線に分割、開設される。

東廻り線⇒往路：横浜⇒大阪⇒神戸⇒門司⇒サイパン⇒チューク⇒ポンペイ⇒コスラエ⇒ヤルート／復路：ヤルート⇒コスラエ⇒ポンペイ⇒チューク⇒サイパン⇒横浜

西廻り線⇒往路：横須賀⇒二見⇒チューク⇒ヤップ⇒パラオ⇒アンガルウ／復路：アンガルウ⇒パラオ⇒ヤップ⇒ウオレア⇒チューク⇒サイパン⇒二見⇒門司⇒横須賀。この南洋航路で多くの美術家たちが南洋群島へ。

1920 大正9年

第1回南洋群島島勢調査が実施さる。結果：群島人口総数 52,222人 日本人 3,671人 現地住民 48,505人 外国人 46人。

1921 大正10年

ヤルート、ポンペイ、パラオ、ヤップ、サイパンの各守備隊を撤収する。民政部をパラオ・コロ

ールへ移転する。東洋拓殖株式会社を主体として、西村拓殖株式会社と南洋拓殖株式会社が合併され、南洋興発株式会社が設立される。

1922 大正11年

臨時南洋群島防備隊条令を廃して、軍隊を撤収する。

2月11日「『ヤップ島』及他の赤道以北の太平洋委任統治諸島に関する日米条約」調印

3月31日南洋庁官制公布。4月1日施行。パラオ・コロール島に本庁を置く。サイパン、パラオ、ヤップ、チューク、ポンペイ、ヤルートに六支庁を置く。南洋庁医院官制・郵便局官制、南洋群島裁判令等発令。

日本人児童の為の南洋庁小学校官制、現地住民児童のための南洋庁公学校官制即日施行。

1923 大正12年

南洋庁法院 南洋庁産業試験場 南洋協会南洋群島支部などが設置さる。

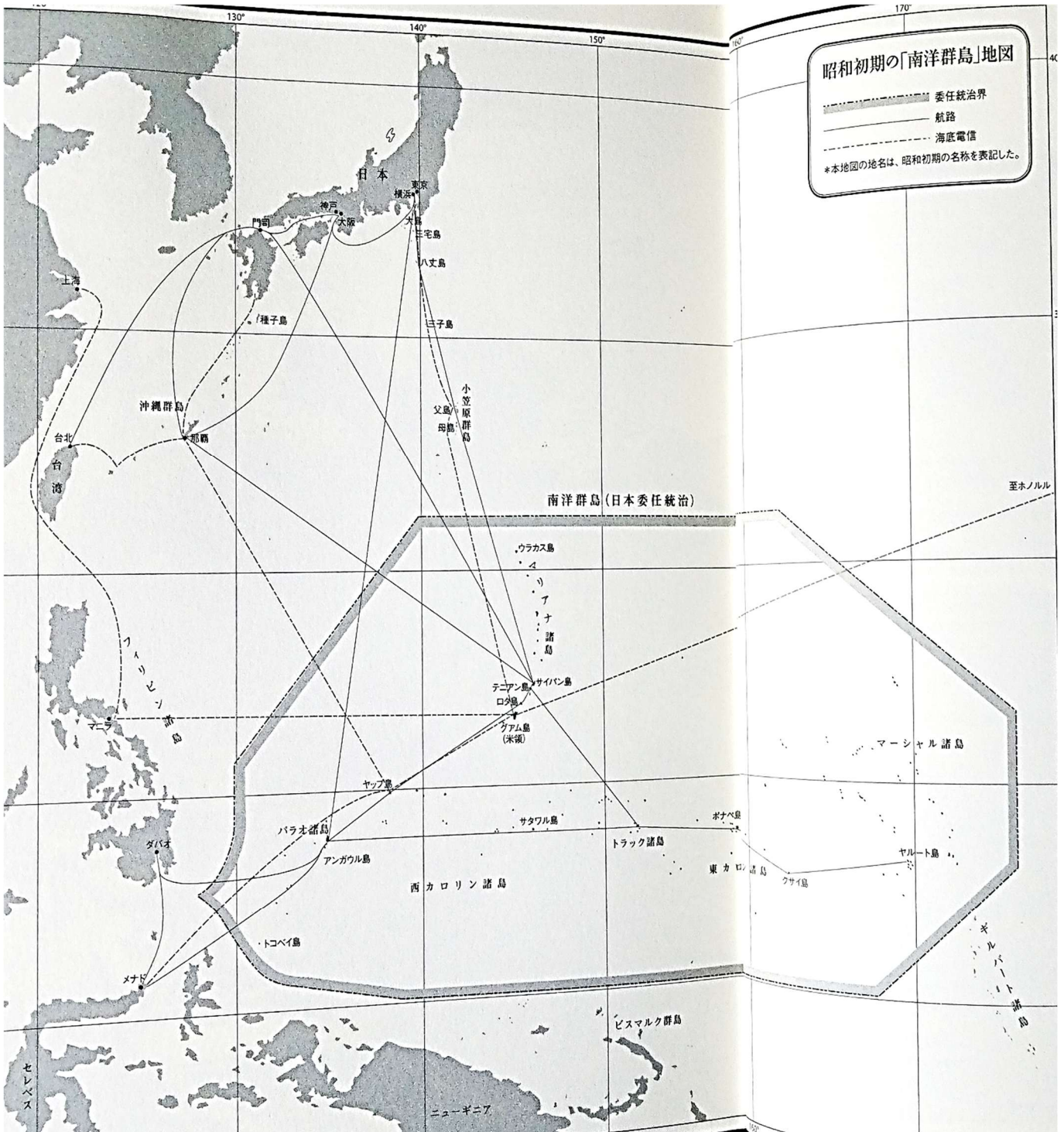
1924 大正13年



日本郵船が南洋東西連絡船を開設。航路：横浜・大阪・神戸・門司⇒パラオ⇒チューク⇒ポンペイ⇒コスラエ⇒ヤルト。復路はこの逆路。チュークを起点に東西の航路が開設されたのです。パラオからヤルト間の東西航路ができたのです。

1925 大正 14 年

2 回南洋群島島勢調査が実施さる。結果：群島人口総数 56,294 人 日本人 7,490 人 現地住民 48,798 人 外国人 66 人





1926 大正15年 昭和元年

ヤップ尋常小学校、ポナペ尋常小学校設置

1927 昭和2年

松岡静雄著『ミクロネシア民族誌』発行

1928 昭和3年

3回南洋群島島勢調査が実施さる。結果：群島人口総数 69,626人 日本人 19,825人 現地住民 49,695人 外国人 96人

南洋庁公学校規則を大幅に改正

1929 昭和4年

土方久功 南洋群島へ 杉浦佐助と出会う（佐助が師事を願う） パラオ庁嘱託となる

1930 昭和5年

南洋貿易株式会社が本社をパラオ・コロールに移転する。

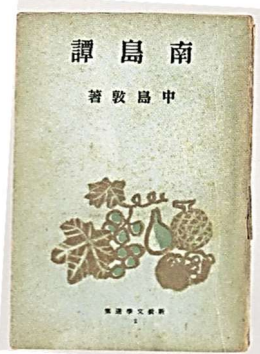
1931 昭和6年

美術家・土方久功ト杉浦佐助がパラオの離島サタワル島へ。人口 280人サンゴの囲まれた周囲 8Kmの島。定期船が年4回やってくる孤島に、1938年迄滞在。

この時期は日本人人口が増えている。製糖事業などの産業従事者が増えている。児童たちも増え続けていて、公学校（原住民児童、日本人児童）が作られていきました。現在も、その学校跡に正門が残っている所が何か所かある。

日本の美術家は、この時期南洋群島への航路開発によって、益々南洋群島に関心を持ち、かつ多くの人たち（50数名）がゴーギャンの世界に刺激を受けて旅立ち、それを求めた。しかし、**土方久功**(1929-1942 パラオなど13年間現地に住む)、**杉浦佐助**(宮大工、1917-パラオで土方に師事、南洋に生きた美術家)、**儀間比呂氏**(沖縄の人 1940-1943 杉浦に師事。戦後活躍)等の真に南に生きた典型的な人物と捉えられています。これら一部の美術家を除き、結果としてエキゾチシズムを、新奇の画題を、求めての取取材旅行であったと言われています。

一方、文筆家は南洋群島の統治が終わる(1945)まで10人に満たない渡航だったとの事。 **中島敦**：美術家の土方と親交のあった文学者。1941-42 パラオの南洋



庁の国語教科書編修書記として居住。帰国後『南洋譚』を著し、「提供された神話を素材として住民たちの精神世界を描き出した」一読をお奨めします。 **石川達三**：移民に関心を寄せていた。1941 パラオへ。帰国後『赤虫島日誌』を出版。日本の植民地政策の実態やパラオ在住の日本人の様子を伝えた。

その他作家達も関心事をもって訪れている、そして作品を残している。詳しいことはまたの機会にしたい。けれども南洋群島時代の南洋諸島が見えてくるのは、文字お越しの作品のなせる業でしょうか。

南洋諸島が、委任統治領としての治政が徐々に一定のテンポ(時系列)をもって整っていく様は、現代の南洋諸島との関係の在り方を考えるとき示唆を与えてくれるように思えます。更にその時代の美術や学術的な本や紀行本はそうした示唆に厚みを増して呉れそうです。ミクロネシアの研究書の中で最高峰と言われる研究書は、1927年松岡静雄著【ミクロネシア民族誌】、1935年矢内原忠雄著【南洋群島の研究】です。この2冊はミクロネシアに関心のある方にはお奨め致します。





第49号

ミクロネシア カセレーリエ

NPOミクロネシア振興協会ニュース

令和3年1月3日

Non-Profit-Organization Association For Micronesian Development News

創立さる。11月1日鎮座祭が挙行さる。8/9

1931 昭和6年

サイパンで「南洋日日新聞」が創刊さる。

1933 昭和7年

3月27日日本が国際連盟を脱退する。

サイパン支庁テニアン出張所が設置される。

南洋庁サイパン実業学校を設置

サイパンで「南洋朝日新聞」が創刊される

1934 昭和34年

南洋石油株式会社がパラオ・マラカルに設立。

パラオ・コロールに日本学術振興会の機関として「パラオ熱帯生物研究所」が設立される。

1935 昭和10年

南洋協会南洋群島支部発行の雑誌「南洋群島」創刊さる。

4回南洋群島島勢調査が実施さる。結果：群島人口総数 102,537人 日本人 51,861人(朝鮮人、台湾人含む) 現地住民 50,573人 外国人 103人

1936 昭和11年

南洋庁熱帯産業研究所がコロールに設置され、支所がポンペイ、サイパンに設置。

南興真珠株式会社、南洋拓殖株式会社がコロールに設置される。

コロールで日刊新聞「南洋新報」が創刊さる。

1937 昭和12年

アンガウル燐鉍所が南洋庁から海洋拓殖株式会社に移管される。

大洋真珠株式会社、南洋電気株式会社、海洋拓殖株式会社、南洋庁水産試験場がコロールに設立さる。

サイパン支庁ロタ出張所が設置される。

1938 昭和13年

海洋水産株式会社設立

1939 昭和14年

この年多くの美術家たちが南洋群島を巡行。

1940 昭和15年

2月11日パラオ・コロール アルミズ高地に天照大神を祭神とする官幣大社南洋神社社殿が



3月6日大日本航空の横浜、サイパン、パラオ線の運航が開始される。この年多くの美術家たちが南洋群島を巡行。

1941 昭和16年 (展覧会等活発開催)

1月、台湾・淡水ーパラオ間の航空路が開設。「南洋毎日新聞」が創刊される。

12月8日(第2次世界大戦)大東亜戦争始まる

1942 昭和17年(第2次世界大戦)

拓務省が廃止され大東亜省が新設、南洋庁がその管轄となる。(展覧会等活発開催)

パラオ放送局が開設される。

1943 昭和18年(第2次世界大戦)

11月米軍がギルバート諸島マキン、タラワに上陸 (展覧会等活発開催)

1944 昭和19年(第2次世界大戦)

米軍上陸後、杉浦佐助は投降する。キャンプで大工、ペンキ屋として働くも、日本兵を救うために洞窟に入り投降呼びかけを行ったが、日本兵に銃撃される死亡。

2月～9月米軍マーシャル諸島、チューク空爆、パラオ襲う、サイパン上陸、グアム上陸、テニアン上陸、パラオ諸島ペリリュウ島上陸。

11月文部省戦時特別美術展(布施信太郎・サイパン島の小景等)

1945 昭和20年

4月米軍が沖縄上陸

8月15日日本無条件降伏(第2次世界大戦終結)

南洋群島の統治終了